

經集の小品における宗教思想

土 屋 好 重

A 真我が求める理想的価値は寂靜

仏典の中で最も古いものが經集 (Suttanipāṭa) であるとせられてゐる。その中に小品 (Cūḍa) と呼ばれる一篇が収録されている。この小品篇の編集者が誰であつたのか明かにされていないが、この篇がその人の考え方によつて作成されてゐるのは当然のことであろう。編集者は釈迦牟尼が説かれた徳目を寂靜・柔和・定などとしてゐるようであるが、彼はその中で特に寂靜を一義的に大切なものとした。彼がどのようにに寂靜を重視したかを系統的に研究することにした。基礎資料としては高楠順次郎監修「南伝大藏經」小部經典昭和四六年を使用することにした。すなわち同書の小部經典一の經集 (水野弘元訳) の中の小品に拠ることにする。

南伝大藏經 小部經典二 小品二八四には、次のように記されている。「往昔の諸の仙人苦行者は、自らよく自制し居れり。〔彼等〕は五種欲をば捨てて、自己の〔真〕の利を行へり。」ここに自己とはどのような意味のものであらうか。

經集の小品における宗教思想 (土 屋)

原語のパーリ語では attan 又は atta であるが The Pali Text Society's Pali-English Dictionary, 1972, p. 20 にはこの語が二つの異つた意味で解説されている。一つの意味では soul のことである。そして今一つの意味では oneself, himself, yourself の場合のように、自分自身とか、彼それ自体とかのことである。釈迦牟尼がその宗教思想を説くに當つて、自己を自己それ自体とか真我とかの意味に使用されたであらうことは当然のことであろう。真の利の利はどのようにに解釈さるべきであらうか。この利は損益打算の場合のような経済的なものではあり得ない。それは真に真・善・美の価値に合すると言ふ評價であると見らるべきであらう。

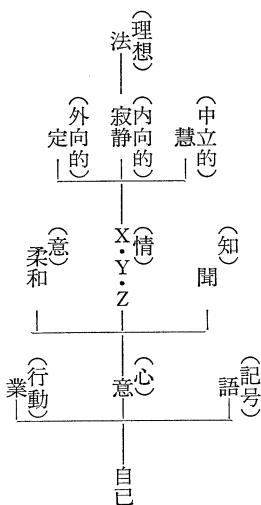
価値には利とか善とか快とか美とか色々のものがあるが、釈迦牟尼が求めたものは寂靜という価値であつた。寂靜は快でもあり美でもあるが、それよりも内向的なものである。小品三三二には左の如く綴られてゐる。「起立せよ、〔而して靜〕座せよ。寂靜のために懸命に學べ。死の王をして、汝等

の不放逸を知りて、「汝等を」翻弄せしめざれ」。寂靜や寂靜美の世界は遠離の味と共通するものと見られる。そこで小品二五七には次の如く記述せられている。「遠離の味と寂靜の味とを飲み已りて、法の喜の味を飲みつつある者は、悩苦なく惡徳あるなし。」

B 釈迦牟尼による五徳目の体系的分析

人間が持つ属性を身・語・心に分ける方法が古代インドにおいて普及していた。この用語は今日の思想から見ると非科学的のようにも考えられる。けれども言葉の上の形式に理解をもつて判断すると、必ずしも排除さるべきものではない。小品三三〇はこの用語を採用して次の如く述べている。

「聖者の宜説したまえる諸の法を喜べる人々は、語と意との業によりて無上なり。彼等は寂靜・柔和にして定に住立し、聞と慧との真髓に証達せるなり。」語は今日の用語では記号とか表象とかに当たるであろう。意は心に当たり業は行動であると解釈されるであろう。図表は、このような解釈法に立つて用語を図示したものである。意識を知・情・意に分析したり、内向的・外向的・中立的のものに区分する方法を導入すると、寂靜とか柔和とかの徳目も体系的に理解し得るものと言える。柔和とか聞とかの徳目を知・情・意に当てはめて見ると或る程度の納得が可能である。ただし情に該当する徳目が見当たらない。そこで一応それをX・Y・Zの記号で懸



案にすることにした。釈迦牟尼の慧・寂靜・定は、理想の世界である。しかもそれらの徳目は情に関連が深いものである。このように分析して行くと、五つの徳目に意識心理学的な根拠が与えられることになると思われる。釈迦牟尼に従うと、自己あるいは真我の理想が慧・寂靜・定であったものと推測される。しかも寂靜こそが内向的な中核的なものであって、それこそが究極的理想であり、法であったものと考えられる。

法という言葉は種々様々な意義に用いられている。小品においても法の意味が多様であることに変わりがない。けれども小品篇では法が定の意味にもとられていることに注意すべきである。二二六は次のようになっていいる。「最勝の仏が讃歎する淨〔定〕、これを〔世人は〕無間定と言う。その定に等しきものある為し。この真理によりて吉瑞あれ。」また三二七は左の如く綴られている。「法樂ありて法を楽しみ、法に

住立して法決定を知り、法を冒瀆する語を語るべからず。」

C 法行とは梵行であり寂靜行である

真我に立つて生きるものは他に依存するものではあり得ない。そこで小品三六四は次のように記している。「彼は諸〔蘊〕依中に〔常樂等の〕堅実を見ず、諸取に対する欲貧を調伏すべし。彼は無依にして他に導かれず、かの比丘は正しく世間を普行すべし。」真我の人は一切のことを自分自身に立つて行なうのである。真我の人は他に導かれるようなものであつてはならない。そこで三八八には左の語が述べられている。「自己を摂制して内を思念し、意を外に放散せしむべからず。」自己自身に立つ人は、結局において、法に生きるものとなり寂靜を行ずることになる。三四二には「汝は寂靜にして行ずるならん」とある。

小品二七四には次のように記述されている。「〔善き〕法行と梵行とは、これ最上の力〔宝〕と言わる。仮令在家より非家に出家せし者なりとも。」法行(dhammacariya)と梵行(brahmacariya)とはしばしば別個のものであると考えられている。それは恐らく梵行に広狭二義があるためであると判断される。二九二の「梵行(不淫)と戒と質直と柔軟と苦行と、柔和と不害と忍辱とを、〔彼等婆羅門は〕讃説せり」の場合、梵行が狭義のものに使用せられている。それは他の徳目の一つである不淫と同じの意味に解されている。けれど

も、三五四では広義のものに用いられていて、「そ〔の涅槃〕を目的とする梵行をば、劫波師は行ぜり」と記されている。もしも梵行を広義に解すると、それは清淨行の意味である。それは寂靜行とか正行とか翻訳せられている samacariya と同じ内容のものとなる。それは同様に法行とも内容が同じものになる。

三二七に「法を楽しみ」とあり、また二五七に「遠離の味と寂靜の味とを飲み」とある如く、法に生ずることは寂靜に生ずることである。そして法を楽しむことが寂靜を楽しむことと同一である。釈迦牟尼の究極的な理想は法に生ずることであり法を楽しむことであつた。また寂靜を楽しむ寂靜を味わうことであつた。釈迦の心境においては法とか善とかは楽しみであり美であつた。善は行ないたくないものでなく、寂靜美を味わうために行なわざるを得ないものであつた。それは人に強制されて行なうものでなく、自ら進んで行なうものであつた。少なくとも法行とか梵行とかに関しては倫理学の世界と美学の世界が同一であるとせられたのである。法行とか梵行とか寂靜行とかを出世間法の境地と見ると、これに對立するものに世間法の境地がある。世間法とはどのようなことを内容とするものであろうか。世間法の価値は利得・不利得・名声・不名声・賞讃・毀譽・樂・苦であるとされている。それは縮めると、利得・名声・賞讃・樂を理想と

するものと言える。更に分析すると、それらは感情系統の樂と賞讃および意志系統の利得と名声とに整理することが出来るであろう。なおその根底になっているものは樂または快樂と、利得または利益であると推定される。小品篇では世間法は出世間法の妨げになるものであると考えているようである。何となれば二六八は次のように記述しているからである。「諸の世間法に触るとも、その心動揺することなく。無憂・離塵・安隱なるは、これ最上の吉祥なり。」世間法は一見、出世間法と矛盾する好ましくない価値体系であると思われるかも知れない。寂靜を一義的に重んずる出世間法の価値体系と対立するものだからである。釈迦牟尼の宗教思想においては、この二つの価値体系がどのように統合せられているのであろうか。

D 出世間法を補完するための世間法

寂靜の境地に達し寂靜行を樂しむに至ったものは解脱した人である。解脱した人は他の人も解脱して自分と同じ境地に入れることを希望するであろう。そして自分の理想としての寂靜行を、他の人たちにも行なわせたいと考えることであろう。けれども一般の人たちは世間法に従がうことを理想としている。そのため解脱者が、どのように強制的に相手方を納得せしめようとしても、相手方はそれに従がうことがない。相手方を満足させるためには相手方が欲するものを与えるの

他はない。相手方には相手方の欲するものを与えることによって、自分も自分自身の寂靜の境地が保てると言えるのである。自分は相手方が自分の境地になる時まで、根気よく待つのはないのである。これは即ち、出世間法に従がって行動するためには、その補完のために世間法を併用する必要があるという境地である。自分自身が相手方に対して寂靜さが感じられるように、相手方には相手方が欲するものを与えようとする行き方なのである。三六八に「世間にて何物をも害すべからず」と教えられているのは、恐らくそのような精神が表現されているのであろう。与える場合と同様に相手方から物を受ける場合も、世間法を併用して、出世間法の理想を補完する必要がある。それを具体的に教えている語には次のものが挙げられる。二九五、「米〔食〕と臥具と衣服と酥と蜜とを乞い求め、如法に〔其等を〕受取りて、其中より施与を営めり。」次に四〇四の語は左の如くに綴られている。「如法〔に得たる財〕もて父母を養うべし。彼は正當なる商売を行ふべし。斯く行じつつある不放逸の在家者は、〔死して後〕自光と名づくる天に生ず。」

（愛知学院大学教授・經博）